

北原恵氏の学位請求論文『『天皇ご一家』の表象——歴史の変遷とジェンダーの政治学』は、明治期から現代にいたるまでの大衆メディア、とりわけ正月の新聞紙面に掲載される天皇および皇族の図像がどのような移り変わりを見せ、またそれがどのような社会的意味をもつかを、膨大な文献・図像資料を精査しながら、表象文化論的観点から考察した労作である。元旦の新聞紙面を飾る「天皇ご一家」の肖像写真は、われわれにとってなじみ深いものであるだけにいっそう、そのビジュアル・イメージをつくりあげている、あるいはその背後ではたらいっている、文化的・社会的・政治的ないくつもの力とその相互作用を見きわめることは困難である。北原氏は、天皇制研究、美術史、家族社会学、ジェンダー論、メディア論など、きわめて広範囲にわたる複数の視点からこの問題に取り組んでおり、イメージをたんに閉ざされたテキストとして読解するのではなく、イメージをそれが生み出された時代と空間のなかに置きなおすことによって、その形成過程と歴史の変遷、機能と意味を解明しようとしている。

論文は、序論で論文の主題と構成、方法論が述べられたあと、明治・大正から戦時期、占領期、そして現代と時代を追いながら 6 つの章がおかれ、最後に結論がまとめられている。以下、論文の章立てに添う形で、その概要を見ておこう。

第1章では、「天皇一家像」成立の前史として、明治から大正・昭和前半にかけての天皇・皇室の視覚化の様態が分析される。まず最初に新聞以前の大衆メディアである錦絵と石版画がとりあげられ、行事記録としての色彩の強い錦絵のなかで生みだされた皇室のビジュアル・イメージが、より写実性を増した石版画において「記念碑的肖像」に変容し、それがさらに「新聞附録」の皇室肖像へと引き継がれていくさまが、具体的な図像をもとに説得力をもって述べられる。

第2章では、大正後半からまずは皇太子・摂政として、後に「御真影」として元旦紙面に定期的に姿を現す昭和天皇の肖像とその家族の図像が分析される。ここでは、第1次大戦後の世界的な君主制の没落と、大正天皇の病気という国内外の二重の危機に対処すべく、近代化・西洋化・科学の推進者のシンボルとして「可視化」された皇室（皇太子）像が、さらに子どもたちを交えた「家庭」というイメージをまとうことによって、天皇制再編のなかで重要な役割を果たすようになっていくプロセスが、メディア論、絵画・写真史、家族論、ジェンダー論の視点からダイナミックに解明される。即位後しばらくは天皇が姿を消して、子どもたち中心だった皇室像が、時局が戦争へと向うなかで「竹の園生」という家族像として再編成されていく過程を扱った第1節、その意義を多面的に分析する第2節という構成もバランスが取れており、多方面にわたる先行研究も適切に利用されている。

なお、この章には補論として「植民地における正月新聞の皇室表象」が付されており、戦前に朝鮮、台湾、満州で発行されていた日刊新聞における皇室像が分析されている。調査範囲や内容分析に関して不十分な点も見受けられるが、今後の課題としてこの補論をいっそう充実させることによって、本論の議論もさらに広がりと深みをもつものになることが期待される。

第3章で取り上げられるのは、1943-44年に開かれた第二回大東亜戦争美術展に出品され、その後姿を消した3枚の絵画を中心とした「戦争画」の問題である。戦時中の天皇・皇后の図像を、「祈る・統率する・癒す」という3機能に分節し、戦後のそれらの図像の扱いを問い直すという問題提起は（失われた絵画の行方も含めて）ひじょうに興味深いものだが、失われてしまったがゆえの資料不足ということもあり、議論の展開としてはいささか不満が残る。今後のさらなる調査・検討を求めたい。

第4章でも天皇／マッカーサー会見写真（1945年）という具体的な図像が取り上げられる。撮影された3枚の写真とそれをめぐる言説の詳細な分析によって、この写真の「屈辱」の実相が明らかにされ、ジェンダー論的な新たな視点が提示される。現代美術におけるパロディ作品まで視野に入れつつ表象文化論的に展開される議論は示唆に富んでおり、天皇の戦争責任まで含めた今後の議論の展開におおいに寄与するものと評価される。

第5章で扱われるのは、この論文の主題ともいえるべき、戦後作りだされた「天皇ご一家」像である。占領体制のもとで危機に瀕した天皇制が「人間天皇」「象徴天皇」として再編成されていく過程を、天皇およびその家族の身体表象の推移を通して考察したこの章の前半では、北原氏のいう「ジェンダーの政治学」が全面的に展開されており、史実を的確に追いながら、そこにはたらく錯綜した力関係が明確に解き明かされる。後半では、この「元旦写真」（プライベートなご一家）と対をなすものとして創出された「一般参賀」（パブリックな皇室）が検討され、次章の中心的課題となる皇室の「公私」問題へとつながっていく。章を通じて、論の展開に一部強引な感を与える個所があり、論点の掘り下げが不十分な点も指摘されたが、「天皇ご一家」像が「表象装置」として成立していくプロセスの解明とその機能の分析は十分説得力をもち、高く評価することができる。

第6章では、最近の皇太子妃の出産をめぐる報道や言説を出発点にして、皇族の妊娠・出産、そして病と死の表象の問題が、前章を引き継いだ「プライベート／パブリック」という項目に加えて、「秘匿／公開」という軸を立てて考察される。テレビや週刊誌まで含めた膨大な資料をもとに、歴代の皇后・皇太子妃の「母性」がいかなるイメージと結びつき、それぞれの時代の皇室像の形成にいかなる役割を果たしてきたかを分析していく手際はここでもみごとである。ただし、皇室の「プライバシー」問題を契機に導入される「秘匿／公開」の基軸は、昭和天皇の「下血」報道をめぐるきわめて興味深い論点を提起しながらも、十分に機能しているとは言いがたく、今後のさらなる考察の深化を待ちたい。

最後に「結論」と題する章がおかれ、皇室の「公私」問題、天皇家の家族イメージが再考された後、全体がジェンダー論的な視点から総括されている。

以上見てきたように、北原恵氏の論文『天皇ご一家』の表象——歴史の変遷とジェンダーの政治学』は、近代天皇制の成立およびその再編成という歴史的過程のなかで、天皇および皇室がビジュアル・イメージとしていかに表象され、いかに機能してきたかを綿密に考証したものである。本論とほぼ同等のヴォリュームをもつ別冊の資料集に収められた多数の画像は、それだけでも多大な資料的価値をもち、多くの研究者を触発するものである。これらの資料を丹念に収集した熱意・努力と、それを誠実に読解した真摯な研究態度は、まず第一に高く評価されねばならない。論文の各章がやや独立性が高く、序論から結論にいたる全体を貫く筋道の設定にいくぶん弱さがあることが、ほとんどの審査委員から指摘されたが、テーマ自体の広がりや複雑さからすればやむをえない面もあり、むしろ個々のトピックに関して慎重かつ複合的な考察を重ねた結果と判断される。この研究を通してあらたに提起された論点も少なからずあり、北原氏の研究のさらなる深化・発展が期待されるのみならず、さまざまな分野の専門家にとって今後の研究に資するところは大きい。したがって、本審査委員会は本論文の学術的意義を高く評価し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。